

り、能信、能帰心等述べられている。能信を示すには所行との関係性を考察しつつ論じてゆきたい。行信の関係において存覚は「信行不離・機法是一」等と示され、行と信というように離して論じることなく、不離、是一の関係を強調されている。所行(行)能信(信)不離であって、能信(機)所行(法)是一である。なぜなら所行の法のほかに能信があるのではなく、また能信のほかに所行の法はない。行巻釈において所行の法に就いて能信の名を挙げると示されるのは、所行法全体のなかに能信が込められているという釈であると考ええる。また能信とは所行の法によるがゆえ、能信全体に所行の法がある。

存覚においては行信を解釈するにあたって、能所という語を用い所行能信と明かされたのであるが、これは特に親鸞が説かれた他力回向義の顕彰のためであったと考える。さらにその行信の不離、機法是一ということとはしばしば強調されたところである。もともと古い宗学として、脚光を浴びるべき行信論であると考ええる。

環中の廻心についての一考察

——『正中録』著述の真意——

西原法興

環中は前惑乱期より願生帰命説に関与した学僧であり、その研究は教学史上重要である。

彼は元来願生帰命派であったが、大瀛の『横超直道金剛録』が出るや翻然と廻心して帰正したとする説があるのに対して、

捨邪帰正の事実はなく終始一貫した正意安心の学匠であると主張する説との双方が存在する。そこで廻心の有無の問題に加えて、『横超直道金剛録』後の著述『真宗安心正中録』(以下『正中録』)に於ける結論である「正中」に關してもその真意が解明されねばならない。

まず『願生帰命弁』(宝曆十四年・一七六四)における功存教学の焦点は、①三心即一は欲生一心におさまる②たのむとは三業を表相するものという二点であるが、その継承者である環中は『建幢摧邪篇』(寛政元年・一七八九)の中で、①たのむは帰命の義・願生安楽の義②欲生は信樂の相③信樂正因は十劫安心④三業表相は勸門の施設と論述している。

一方、寛政十一年(一七九九)の『真宗法輪碾録』は『浄土真宗金剛録』(寛政九年・一七九七)に説示される別取信樂説を批判する書と考えられる。環中に一貫した思想は、衆生の至心欲生の二心を廃捨することを批判し、至心信樂の二心を離れた欲生ならば、それは弘願の欲生ではないとする。大瀛が機側で語るのとは信樂のみであるとし、至心欲生には即一を語らないのは誤りであるとし、至心信樂欲生の三心は皆一心であることに力点を置いて、機の側で至心欲生の二心も論じなければならぬと言ふ。信樂と欲生は体と相の関係であるから、体である信樂は相を具えているとし、強く欲生を前面に出すのである。即ち大瀛は別取信樂説を立てて願生帰命説を破斥せんとするが、環中は逆に此説を以てそれを救釈しようとしたのである。

次に、廻心の契機となったと云われる『横超直道金剛録』(享和元年・一八〇一)以降に刊行された著書『正中録』(文化

元年・一八〇四)に於いても、①たのむは帰命の義②欲生は信楽の相であるという理解をそのまま踏襲している。同時に信楽には隠顕が存在し、信と願とでは一つの法を異なる角度で見ているに過ぎないと言う。あくまでも真因は信心歓喜の一念に決定するのだが、願心は信楽の隠顕した相なのであり、信楽の一念の時にその願心が相となって顕れると説くのである。つまり信楽の相が願心であり、信楽には必ず願心を具しているから、単信楽ではなく単欲生でもない、まさに「正中」と名付けて自説を展開するのである。

さらに『摧邪篇』でも使用している比喩表現「煙(欲生)火(信楽)の譬え」を『正中録』の随所にも多用していることから、二書は同一の教学的基盤であると推測出来よう。

他方、社会状況を見れば惑乱の大勢は既に決着していることを察し、願生帰命説と信楽帰命説との論理的折衷を図ろうと苦心したのが『正中録』著述の真意とも考察出来る。それ故、此の書の論説に於いては、単信を批判する箇所何倍もの数量を単欲批判に充てざるを得なかったであろう。

以上の事実から、彼は古来より信楽派の間で喧伝されてきたような『横超直道金剛鐔』を見て翻然と廻心したとは言えない。加えて『正中録』と同年(文化元年・一八〇四)に『帰命弁』擁護の書『帰命弁略会義』を出版していることから勘案しても、彼が帰正したとは考え難いのである。成程願生派の主張通り、彼には捨邪帰正の事実認められない。

実直に願生帰命説を信奉し、恩師功存を擁護したことは明白な真実であるが、その願生帰命説そのものが正義であるか否か

については、さらに論義・研鑽を要するであろう。

環中は惑乱の結末を見ずに、文化三年(一八〇六)に六十五歳で示寂したのである。

七百五十回忌の親鸞像私考

御手洗 隆 明

二〇一一年の親鸞七百五十回忌(御遠忌・大遠忌)は後世にどのような親鸞像を遺すのであろうか。ここでの「親鸞像」とは、歴史上の人物として研究された、あるいは著述や伝承されてきた物語の中から読み取られた人間像をいう。

近世以降、浄土真宗の各派と真宗門徒は、五十年毎におとずれる親鸞の遠忌を契機としてさまざまな親鸞像、真宗像を遺してきた。今回の七百五十回忌は従来の親鸞像に何を付け加え、どのような宗教者像を描いて後世に伝えるのであろうか。今回も遠忌を目標にして、真宗各派や多くの人々が親鸞についての積年の課題に向き合い、多彩な成果を成してきたが、まだ七百五十回忌を象徴するような親鸞像は見えていないと思われる。さらに、三月十一日の東日本大震災と原発事故を境として日本社会は一変し、遠忌法要を執行すること自体が問われたことは記憶に新しい。真宗各派の遠忌や関連行事はまだ続くのであるが、ここで一度、親鸞像について考えておくことは無駄ではないように思う。

過去、遠忌を機縁として様々な親鸞像が語られてきた。本願